

フィリピで占いの霊に取りつかれた女奴隷を悪霊から解放したパウロとシラスは、彼女を自由にしたことで女奴隷の主人たちに訴えられました。そして二人は、衣服をはぎ取られ、鞭打たれ、足枷をはめられ、牢に入れられてしまいます。女奴隷を自由にした二人は、自由を奪われてしまうのです。鞭打ちの傷は肉体に苦痛を与え、立っていることさえ困難な状況でした。その上、足にはしっかりと足枷がはめられ、狭い牢獄の中でさえ自由に動きまわることができませんでした。ところが今日の聖書の箇所には、とても驚くことが記されています。そのような状況の中でパウロとシラスは、賛美の歌を歌い、神に祈っていたのです。彼らは、ここ数日の間に起こった出来事を覚え、感謝をしていたのでしょうか。フィリピという町では熱心なリディアという裕福な女性がイエス・キリストの福音を信じ、家族ともどもバプテスマを受けました。リディアは自分の家にパウロたちを招き、もてなしました。それからパウロたちは、女奴隷と出会いました。占いの霊に取りつかれ、主人たちに金儲けの手段として使われていた女性が、悪霊から解放され自由を手に入れた。そんなことを2人で話し合っているうちに、パウロとシラスは鞭で打たれた傷の痛みも忘れて、それまでの出来事を神様に感謝し、賛美し、祈りを献げていたのです。彼らの肉体は痛めつけられ、足枷で縛られ、牢に入れられ、その場所から一步も動くことができない不自由な状態でしたが、鞭の打ち傷は彼らの魂を傷付けることはできず、足枷や牢も彼らの自由な魂を留め置くことはできませんでした。彼らの体は不自由でしたが、自由な魂によって神を喜び、神に感謝し、神に祈りと賛美を献げたのです。これこそ、本当の自由と解放を得た者の姿でした。彼らを監視していた看守は、なぜ彼らがそれほどまでに自由な魂を持っていられるのか、不思議だったのではないのでしょうか。

第二次世界大戦中、ポーランドにマキシミリアン・コルベという神父がおられました。コルベ神父は、熱心な布教活動を行っていたために、1941年2月、ナチス・ドイツの秘密警察であるゲシュタポに連行されます。それでもコルベ神父は獄中でも熱心に教えを説き、たくさんの人々を励まし、勇気づけました。しかしその働きのゆえに、コルベ神父は収容所の所長からにらまれ、殴る、蹴るという暴行を受け、言葉も自由に話すことができないほどでした。けれどもコルベ神父は自分の受けた傷を、主のために受けたと言って喜びました。収容所でも目を付けられていたコルベ神父は、3ヶ月も立たないうちに「死の収容所」と呼ばれていたアウシュビッツへと移送されてしまいます。そこでは司祭たちは、ユダヤ人の次に低い階級で「坊主のぶた」と呼ばれ、鞭で打たれ、重労働をさせられていました。そしてコルベ神父は、ここでも目を付けられてしまいます。

そんなある日、コルベ神父が収容されている獄舎から、一人の逃亡者が出ました。収容所長は、逃亡者が1人出たら、見せしめのためにその同じ獄舎から10名の者を餓死刑にすることを告げていました。餓死刑とは、飢えと渇きの苦しみの中で命を失う恐ろしい刑です。死刑囚たちは、死を前にした恐怖と苦しみの中で猛獣のような叫び声を上げるほどでした。収容所の所長は、逃亡者を出した獄舎の囚人たちの中から次々と処刑する10人を選んでいきました。10人の受刑者が決まり履き物を脱がされると、その中の一人が「ああ、妻と子どもがかわいそうだ。もう一度会いたい」と言って泣き叫びました。そのとき、

コルベ神父が所長の前に進み出ました。「止まれ、ポーランドの豚め、なにをしやがるんだ」、「私は、受刑者の一人に代わって、死にたいんです」、「いったい、どういうわけなんだ」、「私は年寄りで、何もできません。生きていてもたいして役に立ちませんから」、「誰の代わりに死にたいのか」、「あの人の代わりに。あの人には妻子があります」、「おまえは誰だ!」、「カトリック司祭です」。その後、しばらくの沈黙の後、所長は「よし、あいつらと行くがいい」と言って、妻子のことを思って嘆き悲しんだ囚人の代わりにコルベ神父を行かせました。それまでは絶望のあまり狂気に陥った受刑者たちの不気味な叫び声が続いていた餓死房からは、コルベ神父が入れられてから、かぼそい声でしたがコルベ神父の讃美にあわせて歌声が聞こえてきたのです。餓死房の他の人たちが死体のように横たわっているときでも、コルベ神父はいつもひざまずいたり立ったりしながら、高い声で賛美し祈っていました。幾日かが過ぎ、コルベ神父の牢には、生存者は4人だけになっていました。しかも、意識が十分にある人はコルベ神父だけでした。しかしそのコルベ神父も、もう立っていることができず、ただ座っているだけでした。意識を失って土の上に横たわっていた残りの3人も、もうすでに別れを告げる準備ができているようでした。看守らが残っている囚人たちにとどめの注射を打つために入ってきたとき、コルベ神父は片隅で土下座して祈っていました。そして注射器を見ると、自ら腕を差し伸べて死の注射を受けたのです。

自由は縛ることができません。足枷をはめられ、牢に閉じ込められていたパウロは、体の自由は利きませんでしたが、心は極めて自由でした。それに比べて、占いの霊に取りつかれていた女性を自分たちの金儲けの道具として使っていた主人たちは、体は自由でも心は金に縛られて奴隷のような状態だったのではないのでしょうか。

パウロはいったい何故、体を拘束されても自由でいられることができたのでしょうか。パウロは、彼を解放してくださった神様によって自由でいることができました。パウロはかつて、イエス・キリストを偽物と思い込み、クリスチャンを捕まえては牢屋に入れていました。そのころのパウロは、体は自由でも心は縛られていたのではないのでしょうか。ところがパウロは、光の中で復活の主イエス・キリストと出会い、心から自由な者へと変えられていきました。ですからパウロは、体を拘束されても自由なままであることができたのです。パウロとシラスは、牢の中でも神をほめたたえる賛美をすることができました。たとえどんな状態でも自由を得ていたパウロは、大地震が起き、牢の扉が開き、足枷が外れてしまっても、そこから逃げ出す必要さえなかったのです。

一方、牢屋を見張っていた看守は体が自由でも心は縛られたままでした。ですから看守は、地震で開いてしまった牢屋の扉を見たとき、囚人たちが逃げ出してしまったと思い、自害しようとしています。心が縛られていた看守は、自分の命で償おうと考えたのです。すると、パウロが声を掛けます。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」。自由な魂で神に祈りと賛美を献げていたパウロとシラスは、牢の戸が開いてもそこから逃げ出す必要はありませんでした。囚人を監視していた看守の方が、かえって縛られた不自由な生き方をしていたのです。看守は、牢の戸が開いてもそこから出て行かなかったパウロたちの本当に自由な姿に打たれて、思わずこう叫びます。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」。すると二人がこう言います。「主イエスを信じなさい。そうすれば、

あなたも家族も救われます」。看守はその言葉で救われました。看守とその家族は、パウロたちから神の言葉を聞き、信じてバプテスマを受けるのです。

今日私たちは、パウロとシラスの上に起こったさまざまな出来事から、自由ということについて見てきました。私たちは最後にもう一つ、この自由ということに関して重要なことを見ておきたいのです。それは家族のことです。先週、私たちは紫布の商人リディアが家族と共にバプテスマを受けたことを聖書から聞きました。祈りの場所に通っていたリディアは、自分の信仰生活を自分個人のものとするのではなく、家族と共に送っていました。そしてその中で、家族ともどもバプテスマを受けたのです。今日の聖書の箇所では、看守も家族ともどもバプテスマを受けます。自殺しかけた看守は自分の命を救ってくれたパウロとシラスを自分の家に招き入れ、そこで家族ともども神の言葉に耳を傾け、共に救いに与ります。キリスト教の救いというのは、鞭打たれ、足枷をはめられ、牢の中に閉じ込められたパウロとシラスが、賛美の歌を歌い、神様に感謝の祈りを祈ったように、肉体は不自由でも、自由な魂をいただくことなのではないでしょうか。そして、私たちが本当の意味での自由を得るということは、家族や身近な人たちとの関係が保たれ大事にされること、家族や身近な人たちとの関係が整えられていくことをも意味するのです。

わたくしごとになりますが、私たち家族は横浜戸塚教会から送り出されて献身しました。その当時、横浜戸塚教会の牧師だった石田政美先生は、家族伝道に重きを置いておられました。その石田先生がもう何十年も前に書かれた『「家出人クリスチャン」を家に帰そう』という文章の中に、こんなことが記されています。

【「教会に若者がいない。壮年が少ない。その対策はいかに一」。こんな声が多く聞こえてきます。そこで青年向け（受けする）集会などを工夫する。壮年伝道の方法などが話し合われる。しかし、一向に成果が上がらない。その結果、頑張っているのは老人と中年婦人、そして数人の壮年だけというのでは何とも情けない状態です。

それでは、教会はもう若者を捕らえる魅力を失ってしまったのでしょうか。壮年を信仰に導くのがそんなに難しいものなのでしょうか。VIPクラブには、あんなに多くの壮年が集まって来るのに、教会にはどうしてこないのか、考えてみる必要があります。

本当にこのことに危機感を持っているならば、自分の家族（未信者の）に一度聞いてみると良いと思います。家族にこそ、息子、娘、夫、すなわち若者、壮年がいます。なぜ小さい時には一緒に来ていた子どもが、成長するとともに教会から離れてしまうのか。その答えは一番家族が知っています。

家族を粗末にし、家族を顧みない旧態依然とした教会形成、個人の熱心さだけが強調され、熱心に頑張れば頑張るほどに家族をしらけさせ、ひとり天に登らんばかりに喜んでいくクリスチャン。そのような「家出人クリスチャン」に対して、御言葉は警告しています。

「自分の家族を顧みない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、神を知らぬ人よりも悪い。」（第1テモテ5・8）と。

イエスさまは、いやし、慰め、教えた人々を、常に自分の家族のところへ帰るように命じられました。家族の元へ帰らず安易に教会に留まることを選択している「家出人クリスチャン」のあり方を再考することから、真のリバイバルが始まるのではないのでしょうか。】

教会生活に熱心な牧師や執事の子どもたちは、親と同じように熱心な信仰者になるか、あるいは親のそういう姿を見て教会がいやになるかのどちらかだと、よく言われます。教会に家族が集えないのは、私たちのあまりにも強烈な熱心さの故かも知れない。教会では熱心でたいへん素晴らしいクリスチャンであるにもかかわらず、家に帰るとその熱心さの故に家族とうまくいっていない方々がおられます。

私たちは、イエス・キリストに救いを受け、自由と解放をいただいたクリスチャンです。自由と解放とは、壊れていた神様との関係が修復されていく中で、パウロのように自由な魂で、神を賛美し、神に感謝し、祈りを献げることのできる者の姿です。そして、神様との関係が正しく取り戻されていくということは、自分の家族や身近な人たちとの関係も取り戻されていくことへとつながっていくのではないのでしょうか。神と人との正しい関係が取り戻されていく中で、人と人との関係も正しく取り戻されていく。キリストを信じる私たちは、神様から自由と解放をいただいた者として、私たちの一番身近な家族との関係をもう一度取り戻させていただく必要があるのではないのでしょうか。家族伝道とは、まずそこから始まるのです。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」。私たちも、このパウロの言葉を信じて歩んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。